

日独戦争と青島鹵獲書籍

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shimura, Megumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050472

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日独戦争と青島函獲書籍

志 村 恵

「青島落つ。皇師向ふところ戦うて勝たざるなく、攻めて取らざるなく、青島の陥落は時日の問題に過ぎざりしも、斯くまで早く陥落せんとは何人も思ひ設けざりし所なり。」1914年（大正3年）11月8日の大阪朝日新聞第一面は、青島陥落を以上のように伝え、青島包囲軍司令神尾光臣とイギリス軍司令バーナーデストンの写真を大きく掲げている。

青島租借地は、そもそも2名のドイツ人宣教師の殺害事件に対する賠償として、1898年3月6日にドイツと中国の間で交わされた膠州湾租借条約に基づくものであった。その後、青島は短期間に「理想の植民地」と称せられるほどの発展を遂げた。「海軍の指揮のもと、ドイツ官僚の厳密な手腕とドイツ市民の勤勉さによって、千年もの瓦礫の上に、人出の多い海水浴場、世界交易の集積所（東洋の製品をベルリンやハンブルクの貨物駅まで運ぶ）、鉄道の終着駅が築かれた。大きな並木通、教会の塔、白いカーテンが掛けられた光り輝く窓、そして明るい家々の赤屋根がわれわれの故郷の風情を与えた」^(註1)と評せられるほどの発展であった。また、青島は東アジアのNorderney（東フリースラ諸島の避暑地）^(註2)、背後に広がる山岳地帯は東アジアのDolomitenとも称されている^(註3)。

しかし、1914年（大正3年）6月28日ボスニア州サラエヴォに鳴り響いた銃声が青島の運命を大きく動かした。すなわち、オーストリー皇太子フランツ・フェルディナンドおよび皇太子妃が、セルヴィア人学生プリンツィプの凶弾によって暗殺されたのである。ちょうど一ヶ月後の7月28日、オーストリアはセルヴィアに宣戦布告。これを受けて、ドイツは8月1日にロシアへ、続いて3日にはフランスに相次いで宣戦布告した。こうして、翌日4日イギリスがドイツに宣戦布告し、さらに8月7日には、同盟国だった日本に対独参戦を要請した。しかし、これはあくまでも「極東水域におけるドイツ軍艦の搜索および撃破について日本海軍の出動を求めるという、限定的なものであった」^(註4)。こうしてサラエヴォの暗殺劇から未曾有の世界大戦が展開していったのである。

ドイツとイギリスが戦争状態に入ったとき、イギリスによる攻撃が予想されたので

膠州のドイツ権益を守るため、動員令がかけられた。大戦勃発時には、青島には約 2850 人の将校および兵士がいたに過ぎなかったからである^(註5)。これを受けて東アジア各地から続々と志願兵が青島に集まった。中には、ハルビンから中国人に変装して（辮髪を付け、化粧を施し）、数週間かけて青島にたどり着いた者も^(註6)、二ヶ月かけてトンキン湾からやって来た者もいたという^(註7)。日本からは約 120 名が海を渡った^(註8)。こうして、日本の包囲軍と対峙したときには、オーストリーの軍艦の乗組員や北京・天津の特別部隊を編入し、合計約 5920 人の兵力になっていた^(註9)。

中国大陸における権益の拡大を狙っていた日本は、イギリスの思惑を超えて膠州湾・青島への進攻を決定した。そして、8 月 15 日にはドイツに対して最後通告を発し、日本および中国方面からドイツ艦隊を撤去することと膠州湾租借地全部を中国に還付するために 9 月 15 日までに日本に引き渡すことを要求し、8 月 23 日までに回答を求めた。ドイツ側はこの最後通告を無視した。よって日本は、8 月 23 日にドイツに対し宣戦を布告した。

18 師団を中心にして編成された青島包囲軍は、9 月 2 日、龍口に上陸。その後、季節外れの豪雨に苦しめながらも、装備を運搬したり塹壕を掘り進めながら、次第に包囲網を狭め、ついに 11 月 6 日から未明にかけてビスマルク、モルトケ、イルチスの各砲台を完全に占拠した。主要陣地を失い、弾薬もほとんど尽きたドイツ軍は、1904 年 11 月 7 日午前 7 時、白旗を掲げた。こうして、東アジアにおけるドイツ最大の交易地青島は陥落したのである。この報を受け、18 師団を送り出していた久留米を始め各地で提灯行列などの祝賀行事が挙行された。

しかし、実際の作戦は上述の大阪朝日の新聞記事とは違いかなりの時間を要した。日露戦争の際の旅順の教訓やドイツ守備隊の兵力に対する過大評価^(註10)からか慎重に包囲戦の準備を行ったが、それでもかなりの犠牲を生じている。死傷者については、いつの世も同じで双方の主張に大きな食い違いがある。著名な中国学者であり、福音派の宣教師であったヴィルヘルムの日記では、日本側の戦死者 17000 人、ドイツ側は、死者 150 人、負傷者 180 人となっている^(註11)。同じく包囲戦を経験し、志願兵となった息子の一人を失ったフォスカンプ（ベルリン福音派宣教会の宣教師）も同様の見方をしている。彼は日本側の死者を 10000 人から 12000 人と推定し、ドイツ側は死者 150 名、負傷および捕虜 250 名としている^(註12)。しかし、これは少し大げさな数字のようだ。ドイツの公式記録としては、日本側は死者が将校 37 名、兵卒 1266 名

で合計 1303 名、負傷者は、将校 108 名、兵卒 3992 名で合計 4100 名。ただし、かなりの数に登ったと推測される病死者は計算に入っていないとする。また、ドイツ軍では、死者が 189 名、負傷者が約 500 名出たとしている^(註13)。日本側の記録に関しては、瀬戸によると日本軍は陸軍で 676 名、海軍で 338 名、合わせて 1014 名の死者を出し、ドイツ側は、死者 209 名、負傷 550 名、病没約 150 名を出したという^(註14)。

しかし、むしろここでより重要なのは名誉や命に対する見方の違いであろう。前述のヴィルヘルムは日記の中で日本軍の性質について以下のように書いている。すなわち、「日本軍の攻撃の仕方は兵士に状況の判断をさせないで、犠牲をかまわずに突進させる。だから戦死者の数がドイツ側とは比べものにならないほど多くなるのだが、兵隊たちになまじものを考える余裕などを与えると、戦闘力が弱まるというのが司令官たるものの心得だということである」。あるいは、「占領した場所をドイツ側に奪回された時、奮闘して最後まで生き残った将校が捕虜になるのを好まず、自ら口中に拳銃を発射して自殺した」^(註15)と。フォスカンプも日露戦争の際の旅順攻撃を引き合いに出し、「日本の将官は、部隊の無意味な犠牲をいとわない」と同じく日記に書きつけている^(註16)。また、天皇への妄信的服従心から再起不能な兵士は、生きているのに味方によって射殺されたとも報告している^(註17)。また、別の報告によると、戦闘の際に、銃を持っているにもかかわらず日本刀を振り回した挙句射殺される将校が時折見かけられたという^(註18)。よく言われるように、捕虜に対する見方も大きく違って、「皇帝の旨を奉じて最後の一人となるまで勇敢に戦ひ自殺をするかも知れぬから其積りで早く総攻撃をやらねば可けぬといふ様な命令も伝へられた。処が蓋を開けて見ると案外なものでまだ防御設備が致命傷を受けたといふ程の窮境に陥入りも何うもして居ないのに埒よく降伏をして夥しい俘虜を平気で出した」^(註19)と、日本には将兵のみならず一般にも捕虜が不名誉との考え方が強かった。一方ドイツ側では、戦争に勝つことではなく、10 倍にも登る敵兵と戦ったということ自体が名誉なこととされ^(註20)、捕虜も勤務の一形態と見なされ、収容所の中で昇進するものもいた^(註21)。

いずれにせよ、日本とドイツの俘虜や戦争遂行に対するものの考え方に大きな差があったことは確実である。青島陥落後、ドイツ側の死者の数を知った日本の将校は、その少なさに驚愕したという^(註22)。

*

青島陥落後、4600名を越える捕虜たちが日本に順次輸送されることになった。捕虜に対する扱いは、近代国家の仲間入りをするためにハーグ条約を遵守する方向と第二次世界大戦における過酷な扱いとの過渡的な中間形態と言ってよく^(注23)、寛容な部分と峻厳・恣意的な部分が混在していた。俘虜の扱いおよび生活等については、多くの研究・報告がなされているので、ここでは一つのエピソードにとどめる。たとえば1914年（大正3年）11月18日に四国愛媛の高浜港に上陸した捕虜の中には、ペットすら連れてきたものもいた。すなわち、「さて、第二集会場で休憩中の捕虜下士卒たちは、十名ぐらいずつ集まって芝生に寝そべったり、トランプをしたりであった。こちらでは、海へ、石の投げ合いをしていた。かと思うと、沖の彼方を遥かに見やっけて思いに沈んでいる者もいた。連れてきた小猿を抱いて、しきりにパンをやっているのは、工兵大隊付の曹長とのことであった」^(注24)。荷物の持参は、かなり自由だったようで、「中には人力車を使用した者もいる。日本軍が捕虜たちに、運べる物はできるだけ多く運ぶことを許したからだった。また雅量を示すため、日本軍は捕虜の身体検査も持物検査もしなかった」^(注25)。

捕虜たちは多くの書籍も携帯してきたようで、これらを集めて、坂東では図書館が作られた。1918年（大正7年）5月19日の聖霊降臨節発行の『バラック』第2巻8号（通巻34号）には、「図書館一周年記念」との記事がある。「元来は膠州図書館から借り出したものをそれぞれが持ち込んだのだが、かさばるので特定の人に30、40と集まってきた」。これに中国や日本から取り寄せた書籍と合わせて、図書館ができたという^(注26)。やがて、東アジア地域のドイツ人クラブや日本の青年協会の援助で図書館は発展し、同年5月20日の坂東収容所図書館一周年の時点で、合計5420冊の収蔵を誇ることになった^(注27)。ここで言う膠州図書館とは、ドイツ軍の兵士・将校用の図書館（Kiatschou-Bibliothek）のことである。そして、青島陥落後そこに残されていた約一万冊の書籍も、他の書籍・文書ともども日本軍に鹵獲され、一足遅れで日本に送られることになるのである。

実際、青島守備軍が接收・鹵獲した書籍の整理に利用し、配分の際に資料として添付した膠州図書館の蔵書目録^(注28)には、相当数の欠本が赤のペンで示されている。

もちろん、純粋な紛失本等が大多数であろうが、ある程度の蔵書が捕虜たちによって運ばれて、日本に渡ったと推察される。

ところで、捕虜たちの帰国が決定し、収容所が閉鎖された際に、これらの書籍はどうなったのであろうか。たとえば坂東（この間、蔵書数は約 6000 冊になっていた）の場合、解放捕虜の引揚げ船である豊福丸に航海中の楽しみのために 500 冊が持ち込まれた。また、残りは横浜のドイツ人学校やシュレーダー牧師、中国在住のドイツ人、神戸の救援委員会へ抑留中の支援への感謝の印として送られた^(註29)。したがって、現在では鳴門ドイツ館にも図書館の蔵書は残っていない。

さて、当時の知識人、教育関係者にとって洋書の重要性は、その高価な値段と入手の困難さのゆえに現在と比較にならないほど高かった。日本軍の青島占拠の際のエピソードを一つ紹介したい。陥落 5 日後、マイスナーはモルトケ兵舎の隣のビール工場に作られた野戦病院に対する軍医部長中島の視察のための通訳に呼び出された。一行がもっとも足を長く留めたのは図書室だった。そこにあるおびただしいドイツ医学書に、日本の軍医部員は瞠目、かつ垂涎した。私有の書籍なので本来は接收できないのだが、彼等の失望を見たフェルスティーン博士は「公正寛大なる接收に対する感謝の記念としてプレゼント」することにした。ただし、それはイギリス人には絶対に渡さない条件であった^(註30)。しかし、これには異説があつて、フェルステン院長は「貫目も重く到底其の儘本国に持ち帰ることも難かしければ、荷厄介なれども我が軍の手に留め置かれ何かの参考ともなし下されば幸ひなりと云い出したり、されど保管と云う名義にて受取るとは責任上にも困ることなればとて、結局院長の手に渡した」^(註31)ともされる。実際に医学書が日本の医師たちの手に渡ったのかどうかは断定できないが、いずれにせよこのエピソードは、彼等にとってドイツの医学書がいかに貴重なものだったかを物語っている。

そもそも明治時代が義務教育の普及の時期であったとすると、大正時代は中・高等教育への熱意が高まった時期であった^(註32)。そして、原内閣は中・高等教育の充実を重点政策の一つとした。したがって、高等教育機関が増設され、また新たに「大学令」を制定して、大学の新設を促した。これによって官立のみならず、公立および私立の大学が認められ、さらに単一学部からなる単科大学も認められるようになった。また旧制高校においても同様で、1918 年（大正 7 年）の時点では官立高等学校はナンバースクールの 8 校だけだったが、その後寺内内閣によって、1919 年（大正 8 年）に

7校（新潟、松本、山口、松山、水戸、山形、佐賀）増やされた。さらに、1920年（大正9年）2校（弘前、松江）、1921年（大正10年）4校（東京、大阪、浦和、福岡）、1922年（大正11年）2校（静岡、高知）、1923年（大正12年）2校（姫路、広島）に高校が設置された。こうして大正末には、官立高等学校の数は合計25校に達した

^(註33)。しかし他方、中・高等教育機関の拡充は言わばソフトウェアの充実を伴ったものではなく、各校は図書等の整備に苦心した。日独戦争の関連で見れば、こうした事情を反映して、たとえば1925年（大正14年）6月17日の次官会議においてドイツからの賠償金問題が扱われ、20万マルクを限度としてドイツの賠償金によって書籍を取得することが決定され、大蔵次官よりその旨がハンブルク領事館に伝えられた。その際、「政治外交、経済等ニ限ラス歴史、文学、宗教、哲学等広キ範圍ニ亘」る「古今ノ良書」を吟味して購入するよう指示があった^(註34)。

*

ヴェルサイユ条約の第8款（山東）第157条には「膠州湾地域内ニ於ケル独逸国有ノ動産及不動産並該地域ニ関シ独逸国カ直接又ハ間接ニ施設若ハ改良ヲ為シ又ハ費用ヲ負担シタル為其ノ主張シ得ヘキ一切ノ権利ハ無償且無条件ニテ日本国之ヲ取得保持ス」^(註35)とあって、日本は旧ドイツ官有動産の保有権を得た。したがって、前述の膠州図書館所蔵の図書ならびにドイツ総督府を始めとする旧ドイツ官庁所蔵の図書および図面は、日本のものと見なされた。

戦利品を神社に奉納したり学校に飾ったりすることは、当時広く一般に行われており、戦利品の分配依頼も珍しいことではなかった。もちろん書籍もその例外ではなかった。1922年（大正11年）4月5日付けで財団法人東亜同文会会長牧野伸顕は、陸軍大臣山梨半造あてに鹵獲文書の分配依頼書を送付している。その文面によると、経済的理由で十分な書籍がないので、鹵獲文書には中国に関する書籍が多数含まれていることもあり、同会への分配を是非に願うというものであった。そして、1922年（大正11年）9月13日付で、書籍928冊と目録2部に対する礼状が送られている^(註36)。

中・高等教育機関からの依頼も相次いだ。たとえば、東北帝国大学総長小川正孝は1922年（大正11年）5月19日付で陸軍大臣山梨半造あてに、『鹵獲書籍及図面目

録』（1920年2月青島守備軍陸軍参謀部作成）、『膠州図書館蔵書目録』（Bücher-Verzeichnis der Kiautschou-Bibliothek）、および『膠州図書館蔵書（洋書）追加目録』の分類に従った希望一覧を添付して、書籍の分配を要請している。東北帝国大学が旧膠州図書館の書籍に関して特に希望した分野は、数学、地理、民俗学、天文学、物理学、医学、建築学、機械工学、農業などである^(註37)。同趣旨の要請書は、東京帝国大学総長山川健次郎からも出されている^(註38)。高等学校では、1920年（大正9年）7月9日付で松山高等学校長由比質から「実ハ当校の如きハ昨年創立され参考図書整備ニハ非常ニ苦心致居候場合ニ有之候間若し何等かの方法にて右様の事可相願ハレ候ハ、誠ニ本校のために幸慶ニ存候次第ニ候就てハ試みニ請願書提出致候間御多用中甚た恐縮なから何分の御詮議被下度奉悃願候」との請願書が提出され、これに対し陸軍省では合計523冊の書籍を配分予定と回答している^(註39)。

青島守備軍陸軍参謀部は、「従来各地大学等ヨリ寄贈移管等ノ申込有之候得共右ハ戦利品ニ付記念ノ為ニ可成公平ニ分配致度」^(註40)とあるように、こうした各地の希望を勘案し、慎重に「鹵獲書籍寄贈分配表」^(註41)を作成した。

まず、同表による配分先は以下のとおりである。帝国図書館（官洋23、膠図678、計701）、拓殖局（官洋332）、鉄道院（官洋20）、内務省（官洋124）、外務省（官洋5、膠図393、計398）、大蔵省（官洋108）、海軍省軍務局（官洋1354）、海軍大学校（官洋446、膠図237、計683）、陸軍省医務局（官洋102）、陸軍文庫（官洋978、膠図731、計1709）、陸軍大学校（官洋477、膠図76、計553）、砲工学校（官洋95）、士官学校（官洋332、膠図90、計422）、中央幼年学校（官洋135、膠図58、計193）、東京帝国大学（官洋357、ウィルヘルムコーン叢書324、学堂洋20、学堂漢2850、膠図963、計4514）、京都帝国大学（官洋1308、学堂漢1448、膠図1457、計4213）、東北理科大学（官洋196、膠図406、計602）、九州工科医科大学（官洋82、膠図174、計256）、北海道農科大学（官洋69、膠図50、計119）、第一高等学校（官洋103、膠図243、計346）、第二高等学校（官洋71、膠図272、計343）、第三高等学校（官洋84、膠図321、計405）、第四高等学校（官洋80、膠図308、計388）、第五高等学校（官洋63、膠図218、計281）、第六高等学校（官洋66、膠図234、計300）、第七高等学校（官洋73、膠図249、計322）、第八高等学校（官洋89、膠図234、計323）、松山高等学校（官洋71、膠図452、計523）、新潟高等学校（官洋73、膠図416、計489）、松本高等学校（官洋80、膠図347、計427）、山口高等学校（官洋153、膠

図 380、計 533)、東京外国語学校・ゲルマニア図書館 (官洋 335、膠図 331、計 666)、青島官庁残置書籍 (官洋 750、官有漢籍 1477、学堂洋 1274、学堂漢 760、膠図 155、計 4416)。総計では、官洋 8634、官有漢籍 1477、ウィルヘルムコーン叢書 324、学堂洋 1294、学堂漢 5058、膠図 9473 の合計 26260 冊が鹵獲され、配分予定になっていた。

次に、鹵獲書籍の配分にあたっては以下のような五つの原則を立てた。「一、徳華高等学堂蔵書ハ青島ニ残置シ将来青島ニ専門学校以上ノ学校ノ設立サルニ際シ挙ケテ之ヲ移管セントス、但シ其ノ洋書中ノ大部分及漢書ノ過半数ハ東京帝国大学文学部教授宇野博士ノ懇望ニ依リ特ニ之ヲ同大学ニ寄贈スルコトトシ之ト權衡ヲ保タシメンガ為、残余漢書ノ約三分ノニヲ京都帝国大学ニ寄贈スルコトトセリ」「二、其他ノ書籍中山東及青島ニ関スルモノハ青島ニ残置セントス」「三、官有漢書ハ雜駁ニシテ山東ニ関スルモノト外価値アルモノ僅少ナレバ之ヲ分配セズ、全部青島ニ残置セントス」「四、ウィルヘルムコーン叢書ハ支那文化研ノ好資料ニシテ之ヲ分割スレバ大ニ其ノ価値ヲ減スヘク且ツ冊数モ多カラザルヲ以テ挙テ東京帝国大学ニ寄贈セントス」「五、是ニ於テ一般ニ分配スヘキ書籍ノ種類ハ官有洋書ト膠州図書館蔵書ノ兩者ナリトス、而シテ之カ処分ハ各書籍ヲ最有効ニ利用スルニ最モ適切ナル部局ニ寄贈スルコトトシ、此ノ要旨ヲ以テ概ネ學術研究ニ資スヘキモノヲ各大学ニ直接実地ニ利用シ得ヘキモノヲ各官庁ニ通俗的ノモノヲ一般学校ニ寄贈スルノ案ヲ立テタリ。」。實際、「鹵獲書籍寄贈分配表」に詳しく記載されている書籍の内容を見ると、この原則が守られていることが分かる。たとえば、陸軍省医務局には、陸軍成規関係 37 冊と医学書 65 冊が配分予定であった。また第四高等学校では、官洋 80 冊のうち、普通雑誌が 9 冊、経済学 4 冊、歴史 22 冊、言語学 12 冊、詩文 5 冊、小説 20 冊、雑書 8 冊、官洋 71 冊、膠図 308 冊のうち、詩文が 22 冊、小説 114 冊、物語 96 冊、文学雑 76 冊となっている。さらに、東京外国語学校・ゲルマニア図書館には、官洋と膠図をあわせて、言語学関係が 179 冊、辞典類が 41 冊と各学校の特徴に沿った配分計画になっている。すなわち、高等学校には文学作品を中心とした一般教養に向けた書籍、また、高等教育機関はその設置目的に適した研究書や実用書、さらに広範な分野の書籍が分配するよう計画されたのである。

この分配計画に加えて「八年九年欧第一六〇三 四八 鹵獲書籍分配ニ関スル件」によれば、水戸、山形、佐賀高等学校に対しても他の高等学校と同程度分配すること

と、軍関係の諸機関（陸軍省、参謀本部、教育総監部等）にも分配するよう指示されている^(註42)。実際、陸軍参謀本部、東京砲兵工廠、陸軍被服本廠、陸軍士官学校、東京陸軍幼年学校に対する旧膠州図書館所蔵本の「図書分配表」が現存している^(註43)。また、青島守備軍参謀部編纂『膠州図書館蔵書目録 補遺』には、水戸、山形、佐賀の各高校にそれぞれ 11 冊、11 冊、13 冊分配された旨記載されている。

ところで、1916 年（大正 5 年）6 月 10 日付けで青島守備軍司令部から陸軍省官房あてへ、同軍司令部が製作した『鹵獲文書目録』を合計 16 部送付したと連絡がなされている^(註44)。また、金沢大学中央図書館には、旧制第四高等学校「青島文庫」に関係するいくつかの書類が残っている。すなわち、青島守備軍陸軍参謀部『鹵獲書籍及図面目録』（大正 9 年 2 月）、青島守備軍陸軍参謀部『鹵獲書籍追加目録』（大正 9 年 3 月）^(註45)、1922 年（大正 11 年）8 月 1 日付けの青参第二五三号「鹵獲書籍目録訂正表送付ノ件通牒」、「鹵獲書籍目録訂正表（謄写目録及欧文目録）」、青島守備軍参謀部『膠州図書館蔵書目録 補遺』および『膠州図書館蔵書目録』（*Bücher-Verzeichnis der Kiautschou-Bibliothek*）である。これらのことを総合すると、鹵獲文書は次のような過程を経て日本に送られたものと思われる。すなわち、青島陥落後ドイツ官有の財産は鹵獲のために集められ、整理された。書籍・書類に関しては、明細な目録を順次作成し、分配のために官庁ならびに中・高等教育機関にそれらの目録が配布された。これを受けて各機関は希望を青島守備軍および陸軍省に伝えた。青島守備軍および陸軍省は、これに基づき最終的な分配計画を進め、青島の中国返還に伴い、その分配を実行したのである。

日本は、1915 年（大正 4 年）1 月 18 日に中国に対して、21 か条の要求を行ったが（その第 1 条で、旧ドイツ権益を事実上日本が保持することを求めた）、これによって中国の猛反発を生み、また国際的にも孤立していた。こうした背景のもと、1922 年（大正 11 年）2 月のワシントン軍縮条約、中国に対する 9 カ国条約、そして日中間で締結された山東返還条約を経て、日本はしぶしぶながら青島から撤兵することになった。鹵獲書籍の各地への配送は、この青島守備軍の撤退と平行して行われたと思われる。ちなみに、撤退は、1922 年（大正 11 年）12 月 17 日に完了している。

なお、旧ドイツ軍膠州図書館があった場所に関しては、『鹵獲文書目録』の緒言に「本目録ハ独逸総督府及万年兵營ニ存在セル公文書類並ニ旧支那税関倉庫ニ存在セル東亜派遣隊ノ書類ヲ整理シテ調整セルモノナリ倉卒ノ際誤謬ナキヲ保シ難シ閲覧者之

ヲ諒セヨ」^(注46)とあることから、万年兵舎、すなわちビスマルク兵舎に設置されていたものと思われる。しかし、なおドイツ側の資料で確認せねばならない。

*

最後に、現在における日本各地に残された鹵獲書籍についてこれまでの調査で判明していることをまとめておきたい。

北海道大学（北海道帝国大学）は、図書受入簿によると 1922 年（大正 11 年）10 月 5 日付けで 304 冊青島守備軍から受け入れている。

東北大学は、旧東北理科大学あての『鹵獲書籍及図面目録』の表紙に、「官有洋書七四冊 これに追加参冊 徳薬学堂洋書八二冊 膠州図書二五〇冊」とある。現在では、一箇所にとまとめて所蔵しているものが 323 冊、混配しているものが約 80 冊となっている。旧東北理科大学所蔵の科学分野の書籍は分類カードが存在し、その寄贈年月日は、1922 年（大正 11 年）2 月 23 日である。旧制第二高等学校については不明である。

新潟大学（旧制新潟高校）は、「図書受入簿」によれば、1923 年（大正 12 年）9 月に 328 冊の寄贈を受けている。また、集中保管している。

金沢大学（旧制第四高等学校）では、1922 年（大正 11 年）7 月 27 日付けで青島守備軍から 357 冊寄贈を受けている。これらは旧第四高等学校所蔵「青島文庫」として集中保管されているが、現存しているのは 354 冊である^(注47)。

東京大学（東京帝国大学および旧制第一高等学校）では、総合図書館に 1925 年（大正 14 年）10 月 30 日付で「青島本之ヨリ」として 585 冊が登録されている。その他、他学部に所蔵されているものもかなりあると思われるが、4514 冊配分予定と冊数が大きいため、まだ確認できていない。また、天災（関東大震災）や戦災で失われたものも多いと推察される。

東京外国語大学では、旧東京外国語学校所蔵のもので、1923 年（大正 12 年）初めに青島守備軍陸軍参謀本部より寄贈の旨が登録原簿にある。しかし、その冊数は 221 冊であって、6 冊が消失し、現存しているのはドイツ語の書籍 213 冊と中国の書籍 2 冊ということである。

信州大学では、最近旧制松本高校所蔵のドイツ書籍が調査され、目録にまとめられ

た^(註48)。これによると、青島守備軍から寄贈された書籍のうち現存が確認されたのは、245冊となっている。しかし、「図書原簿」によれば1922年（大正11年）7月25日付けで青島守備軍司令部からの寄贈として、全部で337冊受け入れたことになっている。

京都大学（京都帝国大学および旧制第三高等学校）では、付属図書館と総合人間学部図書室にそれぞれ1532冊と405冊まとめて収蔵されている。

愛媛大学では、旧制松山高校の旧蔵書籍として379冊。これらの書籍については地震の折、書架から落下した旧膠州図書館所蔵の書籍に気づいた森孝明氏が調査を進められている^(註49)。寄贈図書登録番号原簿に、1922年（大正11年）9月8日付けで寄贈登録されている。

分配表に名前が挙がっているものの、これまでの調査でそうした書籍が確認できなかったり、見つからないとされた機関は、名古屋大学（旧制第八高等学校）、岡山大学（旧制第六高等学校）、九州大学（旧九州帝国大学）、熊本大学（旧制第五高等学校）、鹿児島大学（旧制第七高等学校）および国立国会図書館（帝国図書館）である。残念ながらこの80年の間に、天災や戦災で焼失・紛失したものが相当数あると推察される。

膠州図書館が青島において果たした役割、あるいは鹵獲された書籍が日本の旧制高校や大学において実際どう読まれたかについては、今後の課題としたい。

< 注 >

引用に際しては必要に応じて旧字を新字に書き直した。

(1) Otto von Gottberg: Die Helden von Tsingtau. Berlin und Wien 1915, 15f.

(2) Ders., S. 16.

(3) Ders., S. 32.

(4) 有馬学：『「国際化」の中の帝国日本 1905～1924』（日本の近代4）中央公論社、1999年、108頁。

(5) Rolf-Harald Wippich: Einleitung: Deutschlands „Platz an der Sonne“ in China (1897-1914). In: Heinz van der Laan: Erinnerung an Tsingtau. Die Erlebnisse eines deutschen Freiwilligen aus dem Krieg in Ostasien 1914. Tokyo (OAG-Taschenbuch) 1999, S. 12.

(6) Walter von Schoen: Auf Vorposten für Deutschland. Unsere Kolonien im Weltkrieg. Berlin 1935, S.

- 18; Waldemar Vollerthun: Der Kampf um Tsingtau. Eine Episode aus dem Weltkrieg 1914/1918 nach Tagebuchblättern. Leipzig 1920, 27f.
- (7) Vollerthun, a. a. O., S. 28f.
- (8) Wppich: a. a. O., S. 13.
- (9) 瀬戸武彦:「青島 (チンタオ) をめぐるドイツと日本 (2) 一日独戦争とドイツ人俘虜」『高知大学学術研究報告・人文科学』48 (1999)、108頁。なお、陥落直前の実戦配置では、将校 163、兵士約 3800 と概算されている。Marine-Archiv (Hg.): Der Krieg zur See 1914-1918. Die Kämpfe der kaiserlichen Marine in den deutschen Kolonien. Berlin, 1935, S. 107. 参照。
- (10) Vollerthun: a. a. O., S. 173.
- (11) 新田義之:『リヒアルト・ヴィルヘルム伝』筑摩書房、1994年、224頁。
- (12) C. J. Voskamp: Aus dem belagerten Tsingtau. Tagebücher von C. J. Voskamp. Berlin 1917, S. 129.
- (13) Marine-Archiv (Hg.): a. a. O., S. 94.
- (14) 瀬戸武彦:前掲論文、115頁。他の論者によってもさまざまな数値が上げられているが、明細は省略する。なお、日本帝国俘虜情報局(編)『独逸及奥州国俘虜名簿』(大正6年6月改定版)の末尾の戦死者リストは148番までである。
- (15) 新田義之:前掲書、222頁。
- (16) Voskamp: a. a. O., S. 64.
- (17) Ders., S. 130.
- (18) Vollerthun: a. a. O., S. 174.
- (19) 大江素夫:『青島従軍』、52頁(山口信雄:『青島戦記』大阪朝日新聞社、1915年 収録)。
- (20) Gottberg: a. a. O., S. 10ff.
- (21) 富田弘:『坂東俘虜収容所 一日独戦争と在日ドイツ俘虜』法政大学出版局、1991年、24頁。
- (22) Voskamp: a. a. O., S. 137.
- (23) 林啓介・C. バーディック・U. メースナー:『坂東ドイツ人捕虜物語』海鳴社、1982年、34頁。
- (24) 才神時雄:『松山収容所 捕虜と日本人』中公新書、1969年、136頁。
- (25) 林他:前掲書、11頁。
- (26) 富田:前掲書、208頁。なお、俘虜情報局:『大正三四年戦役俘虜写真帖』(1918年)に大阪俘虜収容所の図書室の写真が掲載されている(57頁)。
- (27) 同書:209頁。

- (28) Bücher-Verzeichnis der Kiautschou-Bibliothek. Tsingtau 1911. (北海道大学図書館、金沢大学図書館所蔵)。なお、巻頭に付けられている 14 条からなる使用規定 (Bibliothek-Ordnung) は、実際の運用を垣間見させてくれる。
- (29) 林他：前掲書、116 頁。
- (30) 棟田博：『桜とアザミ 一坂東俘虜収容所一』光人社、1974 年、80 頁以下。なお、同書の新装版は、『日本人とドイツ人 人間マツと坂東俘虜誌』光人社 NF 文庫、1997 年。
- (31) 山口信雄：前掲書、176 頁。
- (32) 鹿野政直：『日本の歴史 27 大正デモクラシー』小学館、1976 年、180 頁。
- (33) 仲 新・伊藤敏行：『日本近代教育小史』福村出版、1984 年、146 頁以下。
- (34) 外務省外交資料館所蔵の「大正十四年五月 帝国ノ賠償実物取得 1 件 (別冊) 雑ノ部」(2 門 3 類 1 項 135-4 号)
- (35) 外務省：『同盟及連合国ト独逸国トノ平和条約並議定書 附波蘭国ニ関スル条約』1919 年 (大正 8 年) 11 月。
- (36) 「欧受第二二七号 鹵獲書籍分配ニ関スル件」および「欧第二二七号其一 鹵獲書籍分配ニ関スル件」：防衛庁防衛研究所所蔵「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」(陸軍省 日独戦役 T8~1/66) に収録。
- (37) 「欧第一六〇三 四八号 鹵獲書籍寄贈ニ関スル件」(「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録)。同内容のものに、同総長から陸軍大臣田中義一に宛てた書簡がある。それは、すでに青島守備軍司令官宛に 1915 年 (大正 4 年) 12 月 10 日付けで詳しく要求しているが、大臣からも宜しく申し添え願うというものであった。「欧受第四八号 洋漢書籍調査ニ関スル件」(「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録) 参照。
- (38) 1919 年 (大正 8 年) 11 月 27 日付けの「欧受第一六〇三号 洋漢書保管転換ノ件」(「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録) など。
- (39) 「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録。
- (40) 1920 年 (大正 9 年) 2 月 27 日付け「青参第 67 号 鹵獲図書目録ノ送付及処分ニ関スル件照会」(青島守備軍陸軍参謀長向西兵庫から陸軍次官山梨半造あて) (「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録)。
- (41) 「青参第 67 号 鹵獲図書目録ノ送付及処分ニ関スル件照会」に添付された別表の「鹵獲書籍寄贈分配表」。略号に関しては以下の通り。「一、官有洋書 (略シテ官洋トス) ハ独逸各官庁ノ蔵書ヲ集メタルモノニシテ其ノ員数 二八七〇部 八六三四冊」「二、官有漢書ハ右ト全性質ノ漢籍ニシ

テ 八一部 一四七七冊」「三、徳華高等学堂洋書（略シテ学堂洋トス）ハ全学堂ノ蔵書ニシテ 六四四部 一二九四冊」「四、徳華高等学堂漢書（略シテ学堂漢トス）ハ右ト全性質ノ漢籍ニシテ 一六三部 五〇五八冊」「五、ウィルヘルムコーン叢書ハコーント称スル学者ガ独逸總督府ニ寄贈シタル支那ニ関スル洋書ニシテ 二七二部 三二四冊」「六、膠州図書館蔵書（略シテ膠図トス）ハ財団タリシ図書館ノ蔵書（洋書）ニシテ 七五六三部 九四七三冊」と説明されている。

- (42) 「八年九年欧第一六〇三 四八 鹵獲書籍分配ニ関スル件」（「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録）。
- (43) 「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録。なお、分配冊数は陸軍参謀本部へ 111 冊、東京砲兵工廠へ 17 冊、陸軍被服本廠へ 11 冊、陸軍士官学校 1347 冊、東京陸軍幼年学校 146 冊である。
- (44) 「欧受第 816 号 鹵獲文書目録送付ノ件通牒」（「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録）。
- 同趣旨のものとしては、「大正五年以降臨受書類綴参謀本部」（陸軍省 日独戦役 T5～1/30）に収録の「欧受第 80 号」に、青島守備軍司令部から陸軍参謀本部総務部宛てたものがある。
- (45) 1921 年（大正 10 年）2 月 22 日付の「青参第五七号 鹵獲文書目録送付ノ件」（「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録）にこの追加目録を送付した旨が記載されている。
- (46) 青島守備軍司令部：『鹵獲文書目録』1915 年 8 月。なお、同書「乙軍務 第十七庶務 七図書」（124 頁以下）に、図書館関係の鹵獲文書のリストが載っている。
- (47) 志村恵：『金沢大学中央図書館所蔵「青島文庫」蔵書目録（1）（2）』金沢大学文学部論集（言語・文学篇）21（2000 年 3 月）、22（2001 年 3 月）参照。
- (48) 井出万秀・須田明日香（編）：『旧制松本高等学校ドイツ語図書目録』（Verzeichnis der deutschsprachigen Bücher aus der Oberschule Matsumoto (1919-1950) im früheren Schulsystem in Japan）旧制高等学校記念館、2001 年。なお、同目録編纂の経緯については、井出万秀：『旧制松本高等学校ドイツ語図書 ドキュメントをモニュメントに』「Laterne」86（2001）11 頁、参照。
- (49) 森孝明：『「青島守備軍司令部」寄贈図書 - 愛媛における日独交流の跡？ - 』「愛媛日独協会会報」第 8 号（2001 年 7 月）。

< その他の参考文献 >

Johannes Barth: Als deutscher Kaufmann in Fernost. Bremen - Tsingtau - Tokyo 1891-1981. Berlin 1984.

Max Bunge: Kiautschou 1898/1901. Erinnerungen eines ehemaligen Seesoldaten. In Kriegs- und Friedenszeiten beim III. Seebataillons. Tsingtau 1914.

Karl Krüger: Von Potsdam nach Tsingtau. Erinnerungen an meine Jugendjahre in Uniform 1904-1920. Bremerhaven 2001.

Heinz van der Laan: Erinnerung an Tsingtau. Die Ergebnisse eines deutschen Freiwilligen aus dem Krieg in Ostasien 1914. Tokyo (OAG-Taschenbuch) 1999.

Gunther Plüschow: Die Abenteuer des Fliegers von Tsingtau. Meine Erlebnisse in drei Erdteilen. Berlin 1916. 翻訳は、グンテル・ブリショウ：『青島から飛び出して』（若林欽、広政幸助訳）洛陽堂。1918年。

H. Witte: Die Wunderwelt des Ostens. Reisebriefe aus China und Japan. Berlin 1911.

今井清一：『日本の歴史 2 3 大正デモクラシー』中央公論社、1966年。

鹿島守之助：『日本外交史 10 第一次世界大戦参加及び協力問題』鹿島研究所出版会、1971年。

旧制高等学校資料保存会：『資料集成 旧制高等学校全書第一巻総説編』旧制高等学校資料保存会刊行部、1985年。

『旧制高等学校研究必携』編集委員会：『旧制高等学校研究必携』旧制高等学校記念館、2001年。

瀬戸武彦：「青島（チンタオ）をめぐるドイツと日本（1） — 膠州湾占拠から青島の建設まで —」『高知大学学術研究報告・人文科学』44（1995）、141—157。

瀬戸武彦：「青島（チンタオ）をめぐるドイツと日本（3） — ドイツによる青島経営 —」『高知大学学術研究報告・人文科学』49（2000）、59—86。

参謀本部：『大正三年 日独戦史』全4巻、東京偕行社、1916年。

津村正樹：「久留米俘虜収容所における演劇活動（1）」『言語文化論究』（九州大学大学院言語文化研究院）12（2000）、35—48。

中村彰彦：『二つの山河』文春文庫、1997年。

習志野市教育委員会（編）『ドイツ兵士の見た NARASHINO 1915—1920 習志野俘虜収容所』特別史料展（2000.1.5-1.30）目録。

林啓介：『坂東俘虜収容所 <第九交響曲のルーツ>』阿波文庫6（南海ブックス）、1978年。

最後に、調査アンケートに回答を寄せていただいた、北海道大学、東北大学、新潟大学、信州大学、東京外国語大学、東京大学、京都大学、岡山大学、愛媛大学、熊本大学、鹿児島大学の図書館職員の方々に心から感謝の意を表します。また、愛媛大学の資料を頂いた森孝明

氏、「青島文庫」について色々示唆を頂いた金沢大学中央図書館の梶井重明氏、史料の解説を手伝っていただいた金沢大学文学部日本史学コースの笠井純一、中野節子両氏にもお礼を申し上げます。